

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

著作目録の編集にあたって：著作目録の増補・改訂

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅棹, 忠夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001112

著作目録の増補・改訂

梅棹 忠夫

【解説】

1979年刊のわたしの『著作目録』には、1940年から1978年までに発表されたものを収録した。その後、念願の「著作集」も完成し、あらたな著作物もふえた。それら著作物は、ひきつづき現物を保管するとともに、書誌データの作成もおこなっている。

わたしは還暦版の『著作目録』をつくってから、このほどの増補・改訂版が世にでるまでの30年間の経緯と経験についてまとめた。そこでは目録作成の方法やかんがえかたなど改変した点についてもものべている。前項の「著作目録をつくる」を参照しながら読みすすめていただければさいわいである。

『著作目録』刊行の反響

『梅棹忠夫著作目録』（還暦版）は、前項にあるように、9年がかりの編集をへて、1979年6月に中央公論社によって制作、発行された。それは、A5判、横ぐみ、246ページ、項目数にして約2,200、1940年11月17日から1978年12月31日までに発表されたわたしの著作物の書誌を年代順に収録していた（註）。執筆したもののほかに、対談、座談会、編、監修などもふくみ、また、それらが自著に収録されたり、ほかの人の著書に載録されたり、転載されたものなど、わたしの著作活動のすべてを網羅するリストとなった。わたしはそのかなりの部数を中央公論社から提供をうけ、知人に送付した。この刊行をつたえきいて、自分もほしいというもうしこみがあいついだ。公共図書館あるいは大学図書館などからのもうしこみもずいぶんあった。わたしはできるだけ、その希望に応じるようにした。

反響はおおむねよかった。桑原武夫先生は、わらいながら「こんなものをつくられたのでは、はなはだ迷惑だ」といわれた。こういうものをみたら、誰でも自分もつくりたくなるが、もはや現物も散逸してしまってどうしようもない、というわけである。たしかに、中年以後に一念発起したのでは、ひじょうな苦勞をしなければならぬことは事実であろう。著作目録をつくるには、かなりわかいときから、そのつもりで材料をととのえておかなければならぬのだ。

しかし、わかい研究者たちにはよい刺激となったようである。さっそくに、著作物の現物の保存を実行しはじめたひともあり、わたしの『著作目録』にならって、自分のそれまでの著作目録をつくったひとと数人あらわれた。

『著作目録』につづいて、かねてより予定されていた「梅棹忠夫著作集」の刊行も本きまりとなって、1980年の正月の新聞には、中央公論社の年間企画としてその広告がでた。それには「鋭意編集中」とあった。

(註) 梅棹忠夫(編)『梅棹忠夫著作目録』1979年6月 中央公論社(制作・発行)

視力をうしなう

『著作目録』が刊行され、目録の追加も着実に進行したが、かんじんの「著作集」のほうはなかなか進捗しなかった。わたしはあいかわらず多忙な公務に奔走し、じつくりと著作集にむきあう時間がとれなかったのである。

著作集の編集に手間どっているあいだに、こまったことがおこった。1986年の春、わたしは突然に両眼の視力をうしなってしまったのである。即刻入院となり、それから7カ月のあいださまざまな療法がこころみられた。しかし、視力はいくらもどらなかつた。全盲ではなく明暗は感じられても、色彩はまったくなかつた。暗灰色の世界である。ものの形もわからず、字の読み書きは全然できなかつた。これは、わたしのような仕事をもつ人間には絶望的な事態だった。わたしは今後のことをおもうと、暗澹たる気もちになった。わが人生はおわったのかとさえおもった。

入院まえから編集作業なかばの出版企画がすすんでいた。しかし、それには著者が両眼の視力をうしなったからといって、刊行期日をおくらせるわけにはいかない事情があった。出版を予定していたシリーズの500冊目にあてることになっていたからである。本はわたしが海外各地でおこなった日本文明の位置づけに関する講演集である。そのなかにはフランスでおこなった講義もあったので、そのときバりに同行してくれた博物館助教授の小川了氏が編集協力をもうしでてくれた。かれの協力をえて、本は1986年5月に『日本とは何か——近代日本文明の形成と発展』という題で刊行された(註)。わたしはうれしかった。失明中にもかかわらず著書をあらわすことができたのである。

(註) 梅棹忠夫(著)『日本とは何か——近代日本文明の形成と発展』(NHKブックス)
1986年5月 日本放送出版協会

「著作集」刊行

『著作目録』はできたが、公務多忙はその後もつづいて、著作集そのものの編集には、いっこうに着手できなかつた。そうして数年がすぎさつたすえの失明である。視力をうしなって、わたしがもっともくやしいおもいをしたのは、この著作集のことだった。

目がみえなくても単行本はなんとかできあがつた。しかし、著作集はこれとはわ

けがちがう。たいへんな大仕事である。盲人にはとうていできないのではないか、著作集ものこさずに世をさらねばならないかとおもうと、ざんねんでならなかった。

ところが、病院のベッドのなかで、ひそかに勇気がわいて出てくるのを感じたのである。もちろん、たくさんの友人たちのたすけを借りなければならぬが、それが得られれば著作集といえどもできるのではないか。このことを、お見舞いにこられた中央公論社社長の嶋中鵬二氏に相談したところ、嶋中氏は「ぜひ、おやりなさい」と言われた。ことはうごきだした。

著作集をだすまえに、以前からいくつかの出版社と約束をしていた本をつくらねばならない。それらを「筆債」と称して、わたしはせつせと債務の履行にはげんだ。原稿は筆記者の協力をえて、口述ワープロうちでつくり、3年ほどのあいだに編著や対談集をふくめて40冊ほどの単行本を世におくりだした。

単行本の編集作業をしながら、1989年春からは、いよいよ著作集の編集に本格的にとりくんだ。編集委員長は石毛直道氏、副委員長は松原正毅氏におねがいして、さらに編集委員として栗田靖之氏、佐々木高明氏、端信行氏、湯浅叡子氏という協力者をえた。巻数は、当初は全15巻別巻1の構成であったが、途中から7巻の増巻がきまり、全部で22巻となった。各巻の刊行までには、おそろしく労力がかかったが、おおくの協力者のおかげで、ほぼ順調に編集がすすみ、1993年に22巻目を、'94年には別巻の『年譜・総索引』をだすことができた。当初は、別巻には著作目録を収容したいとおもっていたが、概算してみると1,000ページをこすようなことになるので、割愛せざるをえなかった。

著作集の完成によって、わたしはこの世になにものこさずに空に消えてゆくことからまぬがれた。多少の気力がのこっているあいだに、いままでの仕事を総点検して、いちおうの仕きりをたてることができたのである。ここまで気力が持続したことをよろこび、また生きる活力がでてきたような気がしてうれしかった。

米寿をむかえて

1979年の『著作目録』（還暦版）の刊行後に、あらたに発見された著作物がかなりあった。自分でおもいだしたのもあり、友人から指摘されたものもある。最初の著作は1940年の三高生のときのものおもっていたが、1934年の京都一中生のときのものがみつかった。それらはすべてちいさな紙にデータをかきこみ、校訂用の『著作目録』にはりこんだ。

さきにものべたように、この『著作目録』の完成後も、わたしの著作物はふえつづけた。それらの現物は、わたしの研究室の壁いっぱいの大棚に発行日順に収納され、その書誌カードがつくられた。書誌カードは、はじめのうちは、わたしが手がきで2

枚ずつつくっていたが、1982年以降は、秘書の手によるワープロがきになった。ちょうどそのころから、わたしの周辺ではワープロを本格的につかいだしていたのである。

のちに、このワープロがきのカードは5部印刷して、2部は博物館の館長室で発表年月日順のセットと、項目別セットとして保管した。また、べつの2部は自宅の書齋に同様のセットとして保管した。あとの1部は博物館の情報管理施設の情報システム課にわたされ、そこで「梅棹忠夫著作目録」としてコンピューターに入力された。

視力は喪失したが、わたしは国立民族学博物館長の職をつづけた。そして1993年3月末に任期満了で館長の職をはなれて名誉教授となり、顧問となった。

わたしは半世紀以上にわたって、自由に自分の内発的な意思によって仕事をつづけてきた。目はみえなくても、わたしにできることといえば、けっきょく文章をつづることぐらいしかない。まだしばらくは、文筆の道をつづけてゆくほかはないであろうとおもっている。

1943年に大学を卒業してから、わたしは60年以上の学究生活をおくり、2008年6月には満88歳となった。誕生日の2週間ほどまえに、わかい友人たちがわたしの米寿をいわって「梅棹忠夫の世界」という題のシンポジウムとパーティーをひらいてくれた。シンポジウムでは、研究者としてのわたしの経歴紹介につづいて、「遊牧の起源」「文明の生態史観」「情報産業論」をテーマにした講演と討論がおこなわれ、わたしも参加して、意見や感想をのべた。

『著作目録』の増補改訂版をだそう

米寿記念シンポジウムの計画をきかされたとき、これを機会に、わたしは『著作目録』をつくりなおそうと決心した。これからも研究者として、著作者として、現役で活動してゆくつもりではあるが、米寿でもあることだし、ここで、自分のおこなってきた仕事のいちおうの区ぎりをしようおもったのである。

還暦に『著作目録』をだしてから、今日までの約30年のあいだに著作物もふえたが、なによりも宿願の「著作集」を世にだすことができたのは、まことにうれしいことであった。わたしはこの年までながいきをするとはおもってもみなかったが、このほど米寿をむかえるにあたって、わたしは還暦のときにつくった『著作目録』の増補・改訂版を編集し、刊行しようとおもいたったのである。

還暦版の『著作目録』をつくってからのち、このほど米寿版の『著作目録』が世にでるまでの30年の間、情報機器類の発達や普及で出版をとりまく環境は激変したが、出版文化としてはあまり変わらない面もあろう。そのため、書誌データを作成する際には、以前とおなじような混乱が生じた。

また、以前は、通信社の場合、たのめば、その配信原稿が著者のもとにおくられて

きたが、掲載紙はなかなか入手できなかった。それで、「通信社配信」とことわり、発行日のかわりに配信日をもって書誌データをつくったのであるが、のちに、通信社が掲載紙をあつめておくってくれるようになった。その場合、内容はおなじであっても、掲載紙名や掲載日、ときには標題までことなるものがある。したがって、それらはおのおの別の書誌データを作成した。

1979年版の『著作目録』では、記載項目の整理番号は発行日をもとに作成した6桁番号でしめしたが、おなじ日づけでいくつもの業績が出現するケースがあり、6桁ではまかないきれなくなった。それで、コンピューター化以後、当面は発行年月に発行日もくわえて8桁とし、2000年になってからは、すべてのデータの整理番号を10桁とした。西暦年の4桁をそのままつかい、つづいて月日を2桁ずつ、そして同日発行のものに末尾の2桁を順次あてている。

ふたたび「著作」とは

以前からわたしは、わが「著作物」とは、公表された刊行物でなければならないとしていた。その基本的条件に、内容について権利が主張できるか、責任をもって応答する用意があるかということをかんがえている。コンピューターが普及した現在では、かんたんに個人のパソコンできれいな印刷物がつくれるらしい。わたしは目がみえないので、いちいち確認はできないが、それらは、あくまでも簡易印刷物であり、私的複製物ではないだろうか。また、発表媒体も多岐にわたる。インターネット上のホームページなどでしか見られないものは、業績カードに書けない項目があったり、内容自体がいつのまにか消されていることもある。CD-ROMでしか見られないものもある。わたしの『著作目録』には、むかしながらの定義にしたがって、紙に印刷されたものだけを登録、整理した。

前項の「著作目録をつくる」にもあるように、「還暦版」のときには、自分の著作物であるかどうかは、署名の有無を決め手としていた。しかし、著作集を編集するときに、無署名で発表したものでも、たしかに自分が書いたものはわが著作物とし、「著作集」に収録した。このほど、『著作目録』の増補・改訂版をつくるにあたり、項目相互の照合のために、底本になる著作データも、著者名のところを（無署名）として著作目録に入れることにした。

また、わたしの著作物が外国語に翻訳された場合も「著作」とすることにした。以前は、著者や出版社にことわりもなく翻訳本が発行されたこともあったが、時がうつるにつれ、それらの国ぐにも国際的に信用されるよう努力してきたし、最近では契約をかわし、印税もきちんと支払られるようになった。わたしは自分の著書であっても、外国語に翻訳された言語でその本を読むことはできない。しかし、思想も構成も

わたしのオリジナルであるし、翻訳本といえども、わたしの著作物であることの「権利」と「責任」が生じているのである。

このほどの『著作目録』（増補・改訂版）には、還暦版と同様、索引はふくまれていない。しかし、人間文化研究機構の研究資源共有化システムのnihuONEをつかえば、検索にはまったくこまらない。どのような手がかりからでも、たちどころに目的のものをさがしだすことができるのである。

米寿版の『著作目録』を作成するときも、幾人もの人たちの協力をえた。著作物の現物入手にはじまって、形態をととのえ、書誌データをコンピューターに入力し、データベースをつくってゆく。おそろしくやっかいな作業をへて、ようやく完成させることができたのである。書誌データのコンピューター化に際しては、永年にわたって国立民族学博物館の情報管理施設の諸氏およびおおくの関係者の協力をえた。協力者すべての人たちにふかく感謝する。

そして、今回、『著作目録』の増補・改訂版をつくるにあたっては、総合研究大学院大学教授の及川昭文氏の多大なる支援をえた。及川氏はなんども千里の国立民族学博物館に足をはこび、わたしどもと議論し検討をかさねて、目録作成の作業を指導してくださった。くわえて、この『著作目録』のデータベース作成と利用についての論文も寄稿していただいた。心から感謝の意を表する。

この『著作目録』を刊行するについて、国立民族学博物館名誉教授の松原正毅氏は、わたしの著作物を再読し、発表当時の批評などをトレースして、「幻視の行為者」という論文を書いてくださった。ありがたいかぎりである。これによって、わたしの研究者としての思想が、よりおおくのひとに理解されることをねがっている。

2008年12月